

# 弥生時代の始まりの土器

— 玉津田中遺跡(神戸市)、<sup>よろ</sup>丁・柳ヶ瀬遺跡・<sup>はったんちよう</sup>八反長遺跡(姫路市) —

縄文時代の終わり頃、稲作が中国大陸や朝鮮半島などから渡来した人々によって北九州へ伝えられ、やがて西日本から東日本へと広まり、弥生時代が始まります。このとき渡来した人々とそれまで日本にいた縄文人が少しずつ混じり合い、後の日本人や日本文化が形づくられたとされています。そして縄文土器と比べると薄くて硬く、文様も形もシンプルな弥生土器がつくられるようになります。

縄文土器は基本的に深鉢と浅鉢の2種類ですが、弥生土器は壺・甕<sup>かめ</sup>・鉢・高杯と器の種類が増えます。壺は稲<sup>もみ</sup>粃などの貯蔵用の器、甕は煮炊き用の器、鉢や高杯は盛り付け用の器と、米の登場に伴う新しい生活様式に適した用途の器が生み出されたのです。

この頃の土器の特徴は、それ以降の時代に比べ、広い地域で非常によく似た土器が作られている点です。時代が新しくなるにつれ、土器の形や装飾方法が多様になり、地域ごとの特色を示すようになっていきます。兵庫県内では瀬戸内海沿岸を中心に、弥生時代の始まりの頃の土器がたくさん見つかっています。

(学芸課 菱田淳子)



弥生前期の壺と蓋